

【親鸞部門（中学生）・奨励賞】

世界という名の小さな檻で生きていくために。

私立大谷中学校 第1学年 岸本 桃果

私にとっての世界。それは小さな檻のようなものだと思っている。

世界には色々な人がいる。裕福な家庭で暮らす人もいれば、貧しい家庭で暮らす人も。六道でいう天上な人生を生きていく人もいれば、地獄な人生を生きていく人もいる。そんな人々全員が、この世界という名の檻の中で共に生きていかねばならない。だから、生きていくことはとても難しいのだ。

でも、難しいことばかりではない。六道の苦しみを耐えて、七歩目に進めば、安心して生きていくことができる。難しいのは、苦しみを我慢できるかどうかだ。世界は小さい。私達人間は、この小さい檻に閉じ込められている。だからこそ、今幸せな人も、今苦しんでいる人も、どうしても関わらないといけない。そこで苦しんでいる人は、

「どうして私だけみんなと違って不幸なんだろう。」

とネガティブ思考に陥ってしまうこともあるだろう。そして、人によっては、耐えられなくなって自ら檻から脱獄してしまうかもしれない。

しかし、これを防ぐことはできないのだろうか。不幸に苦しむことは、誰だってある。でも檻から抜け出そうとする前に、私たちが手を差し伸べることはできないのだろうか。例えば、自分が大会でミスをしてしまい、チームが負けてしまったとする。でもその時に、「よく頑張ったね。次は一緒に勝とう。」

とその人の背中を押してあげることができれば、心が大きく救われる。

私たちはこの世界という名の小さな檻でしか生きていけない。そこで色々な感情をもった人と関わっていくことになる。だからこそ、私達は支え合って、六道を一步ずつ前進していき、七歩目に向かって幸福を掴むために、日々努力して、今日も明日を向かえる。私にとっての世界の小さな檻は、みんなでつくっていくものなのだ。